

放課後の  
図書室

ヤマダヒフミ

(放課後の図書室 →神聖かまってちゃん <http://www.youtube.com/watch?v=u6mFTRlukTA>)

私は放課後の図書室にいた。・・・誰かが、私を呼んでいる。そんな気だっする、そんな淋しい場所だ。放課後に用がある人は少ない。受験の為に残って、勉強するぐらいの人だ。・・・だけど、私の学校の図書室は昔の校長だか誰だかが本好きで、ある時、図書室を大がかりに改築した為に、とてもがらんとした広いのだ。・・・だから、図書室の奥の方には、誰もいない。・・・そこで、私は書棚に隠れて、誰も見えない。・・・私はその古びた空間が好きなんだ。

そこへ夕陽が射す。・・・私は本の中に埋もれて、あの古書が出すつんとした埃っぽい匂いの中で、もう千年も万年もそこで読書が続けてきた偉大な学者のように、佇む。・・・私は一人だ。「ぼっち」なんて言われるけれど。

・・・私は木村君を思い出す。・・・嫌だ。吉仲さんを思い出す。・・・嫌だ。マッチョの木村先生を思い出す。・・・嫌だ。・・・ああ、私はもう何だか、嫌だ。・・・私には、みんなが怖いんだ。どうやったら、皆と一緒に朗らかに笑う事ができない。・・・ある日、クラスの中でいつも目立っている佐伯君が、私の席に来て、言った。

「お前って、ダサくて、モテねえのな。クラスからはぶられても、当然だわ」

・・・私は、何か言い返したかったけど、何も口から出なかった。耳たぶが赤くなって、心臓がドクドクして・・・辛かった。何人かが、少し離れた所で、「ぎゃははは」って笑った。佐伯君は、私の席からすぐに去っていった。私は・・・何も言えず・・・一人で・・・恥ずかしかった・・・。私はただ、一人でそこで耐えるしかなかった・・・。

私は今、放課後の図書室にいる。ここはまるで、学校ではないみたいな、そんな、隔離された場所・・・。塾とも、学校とも、家とも違う、そんな場所。私には、私という女には、この世界のどこにも居場所がない――。でも、放課後の図書室、この場所だけは、私の居場所。そんな気がする。

夕日が差して、眩しい。私は世界の中で取り残される。・・・静かだ。隣の部屋で、演劇部の練習が、まるで古い壊れかけのラジオでも聞くみたいに、壁越しにぼんやりと聞こえる。・・・今日、私は、日が完全に沈みきるまで、ずっとここにしよう。・・・そうして、私はあのいつもの登校路を歩いて、家へとたどりつくのだろう。それでも、私の心は、私の魂は、この放課後の図書室に残ったままだ。